あしたの教育を考える

教育最前線

Education Vanguard

第2号

【特集】

情報社会の学校経営

―学校の情報化

●インタビュー

堀田龍也

東北大学大学院情報科学研究科教授

●実践報告

島本圭子

広島市立藤の木小学校校長

新保元康

札幌市立屯田小学校校長

【三省堂の歩み】

時代を切り開いてきた英語教科書

SSD-EV002.indd 1 2018/08/21 12:08

特集

情報社会の学校経営

――学校の情報化

【インタビュー】堀田龍也（東北大学大学院情報科学研究科教授）

TEXT：by 教育最前線 編集部

今回の特集は、情報社会におかれている学校の経営について、「現場と理論と政策をつなぐ」をモットーに実践研究、政策提案の場で活躍されている堀田龍也先生に、語っていただきました。

情報化の進展による「課題」

編集部　学校の情報化についての現状をどう思われますか。

堀田先生　創刊号でも述べた通り、わたしたちを取り巻く環境はあまねく情報化の波にさらされ、しかもそのスピードは指数関数的に加速しています。ＩｏＴ（Internet of Things）やＡＩ（Artificial Intelligence）は生活や産業のあらゆるところに浸透し、今の子どもたちが生きる未来は、われわれ大人の想像もつかないような情報化社会になるでしょう。わが国を、世界を支えていく人材を育てるにあたって、学校における情報技術の環境整備は待った無しの状況です。

編集部　学校管理職にはどんな課題が生まれていますか。

堀田先生　六月に閣議決定された教育振興基本計画に学習者用コンピュータをこのくらい入れなきゃならない、という具体的な指標が示されました。

今後の学習指導要領はこういった整備状況が前提で授業イメージが語られます。はたして自分たちの学校の対応が十分かどうかは、皆さんにとって最も気になるところの一つだと思います。一方で、情報端末を使って授業をすることと、これからを生き抜くために必要な力をつけることは別である

SSD-EV002.indd 2　2018/08/21 12:08

と認識することも重要です。国立情報学研究所の新井紀子氏らが中心となって子どもたちの読解力を調査し、実はその多くが教科書を読めていないという衝撃的な結果が発表されました。新井紀子氏は『ＡＩ vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）の中で、近未来にＡＩにより約半数の労働力が代替される時代が到来する可能性が高いことに触れ、ＡＩには原理的に意味理解（読解力）に限界があるので、それこそが人間に期待されるべき能力だと述べています。ところが新井氏らが開発したリーディングスキルテスト（ＲＳＴ）を全国の学校で実施し、二万五千人のサンプルから精密に有効回答を集計した結果、ＡＩと大差ない中学生・高校生の読解力が明らかになりました。処理速度とデータベース量でコンピュータに敗れた人間が仕事のマニュアルも読めなかったら、将来大量の失業者を生み出し格差と少子化が加速すると警鐘を鳴らします。

学校ではというと、情報端末などの道具を揃えてその使い方を教えていかなければなりませんが、ソフトやハードの操作習得に終始して、読解力など基礎的な学力の練成がおろそかになっては本末転倒です。問題で何を問われているのかわからないのに、プログラミング教育やアクティブ・ラーニングは成立しないと思います。

編集部　これらの解決にはどのような方策が有効でしょうか。

堀田先生　大きく二つのポイントが挙げられると思います。まず教育の質を高めるための「授業の改善」です。時代に合わせた資質・能力を身につけるためにＩＣＴを活用し、高度かつ効率的な授業をしていく。映像や音声によって学習への興味関心が高まり、先生の説明がよりわかりやすくなるなど、ＩＣＴの有用性は客観テストの結果により十分実証されています。そして次に「学校経営の改善」です。例えば校務支援システムを活かして授業以外の雑務を合理化し、授業に専念できる環境を作る。先生の本務はあくまで授業づくりですから。そしてこれらを早期に実現するカギは、何よりも各種改革の権限を持った皆さん管理職の主体的な行動です。学校情報化への諸問題は学校内部だけで処理できる範囲を超えて存在しています。今後は教育委員会、民間やＮＰＯとの連携が必須となるでしょう。

新井紀子著『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）

リーディングスキルテスト（RST）の例

Alexは男性にも女性にも使われる名前で、女性の名Alexandraの愛称であるが、男性の名Alexanderの愛称でもある。

上記の文脈において、以下の文中の空欄に当てはまる最も適当なものを選択肢のうちから１つ選びなさい。

Alexandraの愛称は（　　）である。

①Alex　②Alexandra　③男性　④女性

解答：①Alex　（正答率は中学生で38％、高校生で65％。チェックポイント：係り受け－主語と述語の関係や修飾語と被修飾語の関係など、文の構造を正しく認識できているか）

【出所】問題、解答と解説は『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）、教育のための科学研究所「リーディングスキルテストの特徴と例題」および取材をもとに、新井紀子氏監修のもと『週刊東洋経済』（東洋経済新報社）が作成。

SSD-EV002.indd 3　2018/08/21 12:08

授業の改善について

堀田先生　いま世の中全体が大きなパラダイムに直面しているさなか、学校だけがこれまでと同じで良いわけがありません。ＡＩがさまざまな仕事を席巻する時代に、人に求められる能力はいったい何なのか。中央教育審議会（中教審）はそういう大きな視座に立って学習指導要領を議論しています。小学校の英語教科化、プログラミング教育、道徳の教科化などといった個別の事象は、これからの時代に必要とされることばかりです。先生にとっては時間の捻出が問題になりますが、これも授業にＩＣＴを取り入れることが有効な対策となります。先ほどの読解力不足に代表される基礎的な学力というのは、習得までに大変時間のかかるものです。この過程に時間を費やしてしまうと、その先にある言語活動や、知識を再構成して他者に伝えるようなアクティブ・ラーニング型の授業にたどり着けません。そこで実物投影機を使ったり、指導者用のデジタル教科書で音を聞かせたり、動きを見せたりして、わかりやすい提示をして授業の品質を高めます。子どもに繰り返し練習させたり、個の習熟度に応じた指導をするところなどは、学習者用ＩＣＴが得意とする分野です。こうして基礎基本の充実を図りつつ、授業効率を高めます。

編集部　ＩＣＴによる情報収集やデータの取り扱いは、学校での言語活動と親和性が高いですね。

堀田先生　授業で教わった内容というのはいわばお仕着せの知識であって、テストで聞かれれば答えることはできるけど、自分の考えとリンクするところまでには定着しているとは限りません。次の段階で受け入れた知識を再構成し、重み付けを変えて他者に伝える。ディスカッションやプレゼンテーションを通して浅い学びを深い学びに変えるのです。表面のデジタルテクノロジーばかりが注目を集めますが、子どもの考える力を伸ばすのが本質です。事例として広島市立藤の木小学校の「かく活動・かくスキル」などが注目に値します。活動の詳細は島本校長の項に譲るとして、実践のポイントはコンピュータの操作に習熟した子どもを育てているのではなく、「かく力」を鍛えることで、前出の新井紀子氏が危惧するような読解力や思考力の低下に対処しているのです。ＩＣＴもアクティブ・ラーニングも、結局は子どもたちに良い学びを提供する道具にすぎません。

編集部　情報化と小学校の英語についてはいかがですか。

堀田先生　全国的に小学校には英語を専門とする先生が常勤しておらず、基本的には担任の教員が授業を行っています。多くの場合、音声のモデルは英語を専門としていない担任の日本人によるもの、そしてコミュニケーションは日本人同士です。デジタル教材にはネイティブ・スピーカーによる音声や映像が収録されていて、何度でも生の英語を子どもたちに聞かせることができます。またデジタル教材は教材構成の一つですので、紙の教材や自作の教材と組み合わせ授業のバリエーションも広がります。小学校での英語は先生にとっても慣

SSD-EV002.indd 4　2018/08/21 12:08

れないことが多いと思うので、ＩＣＴ導入による授業の改善の幅は大きいと思います。

学校経営の改善（働き方改革）

編集部　学校の情報化に伴う、もう一つの課題についてお願いします

堀田先生　いまの先生は教材研究の時間がなくなるくらい多忙で、自信を失って退職を選ぶ方もいる。教職はかつてないほど人気のない職業になりつつある。魅力を取り戻すためには、良い授業をしたいと願う彼らのモチベーションを下げないよう本務に専念できる環境を実現しなくてはなりません。たとえば職員室は合理的なオフィス空間になっているでしょうか。ペーパーレス化の趨勢に逆行してはいないでしょうか。ケアの行き届いた指導には子どもたちの家庭の状況など深い個人情報が不可欠ですが、増大するデータについて管理や共有のセキュリティは十分でしょうか。学校を行き交う情報は膨大で、もはや人間が紙ベースで処理していく時代ではありません。これらの領域には学校業務管理に特化した校務支援システムの活用が効果的です。

編集部　システムを採用する学校は増えているのでしょうか。

堀田先生　導入率だけを見ると相当数の学校が導入済みとなっていますが、実際どれだけ無駄が省けるようになったのかについては、運用方法によって大きな差が確認されています。いまだに一部の先生たちは従前の慣れた方法がベストだと思っていて、やり方を変えずに次々とやること付け足していくので多忙になる。そうではなくて、新システムを使って、彼らのやり方そのものを変えていかなくてはなりません。この権限を持つのは校長と、教頭や教務主任など校務を司る人たちのみですから、彼らがまず情報管理の才覚を持ち、強固な意志で学校のムダの切り落としを進めてほしい。このあたりは札幌市立屯田小学校での校務情報化が好例でしょう。新保校長の項で紹介されるので、ぜひ皆さんの学校でも、できるところから実践してほしいです。

編集部　改善や効率化の先にある、管理者が打つべき次の一手は何でしょうか。

堀田先生　中教審では社会に開かれた教育課程を標榜し、地域の人的・物的資源の活用を推奨しています。かつては学校が特定の会社から支援されることにネガティブなイメージがありましたが、子どもたち先生そして企業がみなＷＩＮ-ＷＩＮであるなら、積極的に外部リソースを活用していくべきです。提携先は地方によって偏りが生じますが、それも学校の特色だと私は思います。対象も企業だけに限定せず、ＮＰＯ、地元の大学や学生、保護者、地域団体と、視野を広く保って連携を探りましょう。また公立校の場合は教育委員会の承諾を取り付ける必要がありますが、校長が明確なビジョンを持って説明すれば、学校自らが動き出す姿に委員会側も刺激を受け、お互いにとって建設的な議論となるでしょう。いま管理職は先生の「上がり」ポジションではありません。自分の学校の経営課題を把握して先生とともに授業品質を高め、どれだけ課題に適合する手を外から借りてこられるかが問われる。いまわれわれはそういう時代に来ているのだと思います。

PROFILE

専門は、教育工学・情報教育。主な著書に『だれもが実践できるネットモラル・セキュリティ』（三省堂）、『プログラミング教育導入の前に知っておきたい思考のアイディア』（小学館）等。

SSD-EV002.indd 5　2018/08/21 12:08

特集

情報社会の学校経営

意志をもって学び続ける

――ICT活用授業に常にチャレンジ

島本圭子（しまもとけいこ）（広島市立藤の木小学校校長）

平成二十二年九月、本校に、児童・教員一人一台のタブレットPC（以下TPC）、各教室一台の電子黒板・実物投影機、無線LAN環境と、ステージⅣ（二〇二〇年代に向けた教育の情報化に関する懇談会のまとめ）のICT環境が整備された。総務省フューチャースクール推進事業実証校・文部科学省学びのイノベーション事業実証校としての整備である。平成二十五年度末事業は終了し、以降は広島市によって環境が維持されている。

八年間に渡る実践継続の鍵は、節目節目の課題解決へのチャレンジであった。

① 黎明期（平成二十二年度～平成二十五年度）

ICTを活用した授業改善
――ベテラン教員のチャレンジ

ICT活用による授業改善を最もうまく行ったのは、ベテラン教員であった。当時は、学級担任十一名のうち七名は教職経験二十年以上のベテラン教員という構成だった。彼女らは、「電子黒板で課題を拡大提示できるので、前の日に提示用教材を作らなくてもよい。」「子供の考えをTPCに書かせ授業支援システムで電子黒板に映し出せば、多くの考えが瞬時に共有できる。」など、ICT活用によって、それまで手間隙かけてきたことに時間をかける必要がなくなった。それにより授業効率が高まり、児童による説明の時間が確保できる、授業時間内に活用問題まで終えられるなど、授業改善が進んだ。授業でやりたかったことが思い通りにできるようになった。公開研究会前の模擬授業では、ICT活用と発問を繋げた議論等、教材の本質に迫る協議を行うことができ、授業の質は深まった。パイオニア精神で、ICT活用を位置付けた授業研究に全力を注いだ三年半、教員がICT支援員とともに作成したデジタル教材はゆうに一千を超えた。

同時期に、研究主任を中心に、学習者用デジタル教科書の活用研究を行った。児童一人一台端末環境の真の意義を知る貴重な研究で、その経験が現在の研究に繋がっている。

② 維持・継続期（平成二十五年度～平成二十七年度）

若手教員の育成
――新たなスタンダード作りと研修

平成二十四年度からベテラン教員の退職、転任、新規採用教員の赴任と、教職員の交替は始まっていた。校長として赴任した平成二十七年度は、学級担任十名のうち六名が教職経験四年未満の若手教員という構成となっていた。

導入当初から、ICTの使い方に限定した指導ではなく、学びの基盤となる生活規律・学習規律「学びのスタンダード」を統一して指導していたことが、この時期に効果を見せた。児童が身につけた生活規律・学習規律に支えられ、彼らは日々実践した。それに加え、基本的な指導方法を統一するための「指導のスタンダード」を研究主任が中心となって作成した。

SSD-EV002.indd 6 2018/08/21 12:08

板書の仕方、ノートの書き方等を含み、ミニ研修で定期的に実践を振り返りながら、定着が図られた。校長としては、「本校ではＩＣＴ活用は当たり前であり、それはこれから強みとなる指導力である。」と告げ、校長室での指導や研修を校内研修と並行して行った。

また、本校で毎年夏期休業中に開催される広島市教育センター主催研修「藤の木塾」では、若手教員も研修指導者としてＩＣＴ活用を解説した。公開研究会では、学習指導案作り、模擬授業の過程を経て、授業公開に臨んだ。謙虚に努力する彼らによって、授業研究のエネルギーは膨らみ、研究推進の風土は一層醸成された。

③ 発展期（平成二十八年度～）

ＩＣＴを活用した学習改善
――「かく活動」と「かくスキル」で新たなチャレンジ

平成二十八年度は、ＩＣＴ活用授業研究の大きな転換点だった。それは、それまでの取組を踏まえた、いわば必然の転換だった。

ＩＣＴ環境導入当初は試行錯誤の連続で、電子黒板を使ったものの板書が残っていない、タブレットＰＣ（以下、ＴＰＣ）を使ったもののノートに書いたのは「めあて」だけ。それではいけないと、電子黒板で見せる内容、板書に残す内容を仕分けるようにした。ＴＰＣは試行錯誤できる操作教材や見せたい情報の提示が有効で、ノートには、学んだことやまとめを必ず書かせるようにした。ところが児童のノートを見ると、板書をそのまま丁寧に写しただけのものもあった。書く活動は、能動的で主体的な思考活動であるのに、そこに至っていなかった。そこで、書く活動の質を高めることが、児童の学びを深めることに繋がる、書く活動とＩＣＴ活用を関連づけることで、児童の学びに役立つＩＣＴ活用を実現したいと考えたのだ。

児童の学びに役立つＩＣＴ活用。授業改善から学習改善へ。授業研究が、学びのイノベーション事業・学習者用デジタル教科書のコンセプトと繋がった。

まずは「かく活動は考える活動。しっかり考えさせたい場面に位置付けよう。」と、授業に臨んだ。絵図を描いたり、ＴＰＣに線を引いたりすることも含め、あえて「かく」と表現することとした。自分の考えをもつ場面に位置付けることが多かったが、容易ではなかった。「使うことばが分からない。」「何を書けばよいか分からない。」「かき方が分からない。」といった児童の姿が見受けられた。この状況を、探究的な学習のプロセス（情報収集―整理・分析―まとめ・表現）に関連付けて、「使うことばが分からない。」（情報収集が不十分）、「何を書けばよいか分からない。」（整理・分析が不十分）、「かき方が分からない。」（まとめ・表現の方法を知らない）、というように分析し、かく活動の質を高めるためには、かく活動に役立つスキルを鍛える必要があると考えた。

そこで、平成二十八年度に、教員の日々の実践から取り出した「身に付けようかくスキル11」（右図）を設定し、児童に提示した。

今年度は、新学習指導要領で、教科等を超えた全ての学習の基盤として位置付けられた情報活用能力の育成を目指して研究を進めている。スキルアップタイムとして、かくスキルを取り出して鍛える時間や、学び方を鍛える時間として、ロングスキルアップタイムを国語科で試行している。目指す授業を具体化するために、私自身も学級で授業を試みたり、模擬授業研修を行ったりしている。

本校児童には、恵まれた環境により、ＩＣＴとのよい出会いがもたらされた。私の学校経営を貫くものは、ＩＣＴを教師の指導に役立つ道具としてだけでなく、児童の学びに役立つ道具として見せていかなければ、ＩＣＴ環境整備は進まない、ＩＣＴ活用も広がっていかない、恵まれた環境にある本校こそが、その具体を見せ続けていく使命がある、という思いだ。そのためには、私自身が学ばなければ、教職員に示すべきヴィジョンを描くことができない。これまでも、これからも、様々な方々との繋がりを貴重な学びの機会として、日々新たに学び続けたいと思う。

PROFILE

広島市立小学校教諭、広島市教育センター主任指導主事を経て、平成二十三年度から三年間、藤の木小学校教頭を務める。平成二十七年度、同校校長として赴任し、今年度で四年目となる。

SSD-EV002.indd 7 2018/08/21 12:08

特集

情報社会の学校経営

情報化で学校の日常を改善する

――学校の働き方改革につながるICT活用のヒント

新保元康（しんぼ もとやす）（札幌市立屯田小学校校長）

① 日本の教師は、千手観音

日本の教師はあたかも千手観音のようだ。

小学校では、一人の教師が、音楽や外国語も含む十種類を超える学習を指導し、給食や掃除の指導、さらには徴収金関係の業務から放課後の不審者対応等々、終わりの見えない業務に毎日向かっている。加えて、放課後や休日の少年団活動に汗する教師も多い。業務の量と種類の多さに加え、その精度も極めて高いものが求められている。

世界を見渡すと、教科の指導だけが教師の主な業務である国が多いと言う。学習指導の他にも細やかに手厚く子供を育てる我が国の学校教育は「日本型学校教育」と称される特別な存在なのである。つまり、「学校」＝「School」ではないのである。

子供にはより質の高い教育を実現し、教職員にはより安心して働ける環境を実現する。これは大変な難問である。この両方を同時に成立させようというのが学校の働き方改革である。国レベルでは、中教審の「学校における働き方改革特別部会」を中心に精力的な議論が続いている。我々も、自らできることをしていかねばならない。

国が「改革」なら、現場は「改善」である。

現場でできることは、小さく限定的かもしれない。しかし、学校の日常には改善できることがたくさんある。

学校現場の改善にはいくつもの切り口があるが、特にICTを活用した改善は、まだまだ未開拓な分野ではないだろうか。

世の中には、最新のICTを導入すると、一気に問題解決できるかのような錯覚がある。

ICTを導入しただけでは問題は解決しない。そこにどんなプラスαのアイデアを加えるかが大事である。ICTをどんな時にどう使うか、ICTの周辺をどう整備するか、小さなアイデアが、学校の日常改善につながる。

② 常設・固定で実現する日常授業改善

日常授業の改善には、実物投影機、PC、大型提示装置を常設・固定することが大事である。これによって学校で最も多く行われる一斉授業の質を向上させ、同時に教師の授業準備等の負担を減らすことが可能となる。

次ページの写真のようなセットが教室にあることで、教師は必要なときすぐに教材を大きく提示して説明することができる。これで、授業は格段に分かりやすくなる。これまでは難しかったノート指導も実際のノートを拡大しながら簡単にできる。

巷では、タブレット型PCの整備が話題になりがちであるが、「学校におけるICT環境整備の在り方に関する有識者会議」の最終まとめには、実物投影機や指導者用PCの整備についても記載されていることに留意したい。

SSD-EV002.indd 8 2018/08/21 12:08

情報化は、まだ過渡期である。デジタルコンテンツが不足している中で、あらゆる教材を大きく提示できる実物投影機は、本当に頼りになる。

大事なポイントは、こうした機器が常に教室にあるだけでなく、十分な広さの台（70㎝×70㎝以上）の上に、配線が完全に済んだ状態で固定されていることである。つまり、常設・固定が重要である。

「PCは、必要な時に運んで使いましょう」では、ほとんど使われない。これでは、授業の質も向上しないし、働き方も改善されない。授業に使う情報インフラは、正にオンデマンドで即座に使えるものでなくてはならない。

■ICT機器の常設・固定（左から、大型提示装置／ノートPC／実物投影機。台の広さは70㎝×70㎝。）

使いたいときには申し込んでから使う道路や水道はない。インフラは「いつでもすぐ使える」ことが大前提なのである。

高速LANに接続されていることも重要だ。当たり前のことだが、PCは、高速ネットワークに繋がれなければ役目を果たせない。道路がなければ自動車が走られないのと同じである。高速な通信インフラの整備は、新学習指導要領全面実施のために必須である。NHK for Schoolには既に、七千を超える優れたビデオクリップが用意されている。番組も全てネットで見ることができる。デジタル教科書も含め、質の高い教材を思いのままに使い、効果的かつ効率的に「主体的・対話的で深い学び」を実現しなければならない。

ICT機器を購入しただけでは、授業は変わらない。このようにプラスαのアイデアで、常設・固定し、高速な通信回線と接続することではじめて日常授業の改善が進むのである。

③ 校務支援システム導入と共に業務を見直す

校務支援システムを導入しても、これまでと同じような業務の進め方をしていては業務改善は全く進まない。校務支援システムの導入にプラスαのアイデアを加えることが必要である。

校務支援システムには、スケジュールを共有する機能や、情報を共有するための回覧板のような機能がある。こうした機能を使い始めたら、教頭の後ろの予定表は書く必要がないし、職員朝会も行う必要がない。

「今までの方法に慣れているから」として、従来どおりに行事予定を黒板に書いたり、職員朝会を続けていたりしたら、仕事はむしろ増えてしまう。

ICTを活用した業務改善の初期には、困難を感じることがある。慣れるまでは、むしろ効率が下がることすらある。しかし、そこをぐっとこらえて、業務を見直すことが必要だ。スケジュールを校務支援システムに一本化することで、一度の入力で、行事予定表と学校日誌が同時に作成できるようになる。職員朝会を思い切って廃止すれば、朝から子供の話をじっくり聞く時間が取れるようになる。

職員会議の見直しも重要だ。議論は重要だが、限られた時間の中では、全員で議論をつくすことは難しい。事前に校務支援システムで意見を募ったり、主任などの少人数の会議で議論を深めたりすることが重要になる。

そして、生み出された時間を使って、子供の声により耳をすまし、明日の授業準備に力を入れる。ICTを活用することで、時間を削減しながら教育の質を向上させる道をさらに探っていきたいものである。

PROFILE

文部科学省二〇二〇年代に向けた教育の情報化に関する懇談会WG2委員、文部科学省次世代学校支援モデル構築事業委員、北海道社会科教育連盟委員長。著書に『「校務の情報化」で学校経営がこう変わる』（編著、教育開発研究所）。

SSD-EV002.indd 9 2018/08/21 12:08

【三省堂の歩み】

時代を切り開いてきた英語教科書

富岡次男（株式会社三省堂 執行役員 英語教科書出版部長）

三省堂は明治時代の中期に、それまで海外で出版されたものの翻刻が普通だった時代に、日本人自らが編纂した中学校用の英語教科書『神田リーダー』を世に出し、多くの方に支持されました。以来、今日に至るまで、進取の精神に富んだ創意工夫ある教科書作りを目指して、我々の先輩たちは知恵を絞ってきました。現在は、中学校用一シリーズ、高等学校用七シリーズの英語の検定教科書を発行しており、それぞれの教育現場で大変多くご愛用いただいております。

●中学校と高等学校の「クラウン」

当社の中学校用英語教科書は『ニュー・クラウン』であり、昭和五十三年に初版が刊行されています。それ以前の多くの英語教科書は、アメリカが舞台であり、登場人物もアメリカ人やイギリス人がほとんどでした。いまでこそ、英語は国際的な共通言語という認識が広まっていますが、当時は、英語の先生方をはじめ一般の方々に至るまで、英語は英米の言語であり、アメリカやイギリスの生活や文化、ストーリーが教科書の主たる題材になっていることに何の疑念も感じなかった方が多かったと思います。そこに『ニュー・クラウン』の登場です。日本を舞台にして中国人やケニア人などもメインキャラクターとして活躍する新しい教科書に、多くの人は大変驚いたようです。英語の教科書になぜ中国人が登場するのか、と批判的にとらえる先生がたも少なくありませんでした。しかし、「画期的な教科書」と、次第に当社の考え方を支持していただける先生方も増え、おかげさまで採択部数も伸びていきました。現在も全国で百万人弱の中学生がこの教科書で学んでいます。

「クラウン」の書名は、当社では重要なブランドで、教科書だけではなく、辞書や参考書にも使われています。その名を冠した教科書が初めて刊行されたのが、大正五年の『クラウン・リーダーズ』で、当時の中学校（現在の高等学校）で多く使われました。その流れを汲む高等学校の英語コミュニケーション用教科書『クラウン』は、業界で一、二位を争う部数をいただいており、とくに各都道府県の伝統校、進学校での採用が多く、各界のリーダー層から、この教科書で学んだという話をよく伺います。

●三省堂の願い

当社の英語教科書が、従来からの英語教育から脱却して、新しい地平を切り開いたいくつかの観点を『ニュー・クラウン』を例に、次ページでご紹介しています。子どもたちに英語を教えること、子どもたちが英語を学ぶことを、どのようにとらえているかというコンセプトの一端を感じ取ってもらえればと思います。これらは、その後、他の多くの英語教科書に影響を与え、それぞれの基本的なフレームワークとなっています。

教科としての「外国語（英語）」は、あくまでも学校という場で行われる教育活動の一環であり、英会話学校とはおのずから一線を画しているはずです。英語の運用能力をつけることも大事なことですが、人間教育でもあるという側面を忘れずにいたいものです。とくに義務教育の過程においては、むしろそちらのほうが大事だとも言えます。

日本の子どもたちの知的好奇心を刺激し、心を揺さぶり、さまざまな角度からものを見る観点を提供してきた『ニュー・クラウン』。小社の教科書を使いながら英語を学んだ生徒たちが、英語の力と同時に「考える力」もブラッシュアップして、グローバルな社会に生きるたくましい人材として育っていってほしいと願っています。

（『ニュー・クラウン』が、従来からの英語教育から脱却して、新しい地平を切り開いたいくつかの観点を次ページでご紹介します。）

平成28年度版『NEW CROWN Book 1～3』

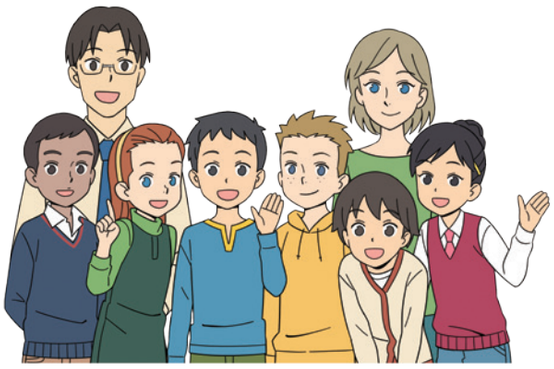
PROFILE
［とみおか・つぐお］一九八三年、三省堂入社。八年間、営業の仕事に従事した後、英語教科書編集部に配属され、「ニュー・クラウン」と係る。一九九八年からは小学校向けの英語教材の開発も手掛ける。二〇一八年より現職。

SSD-EV002.indd 10 2018/08/21 12:08

日本人のための英語教育

初版以来、生徒の生活感覚から遊離した英語学習にならないという基本的な考え方から、場面設定は基本的に日本とし、登場人物も日本人を中心に、彼らと交流する外国人との関係でストーリーを組み立てています。

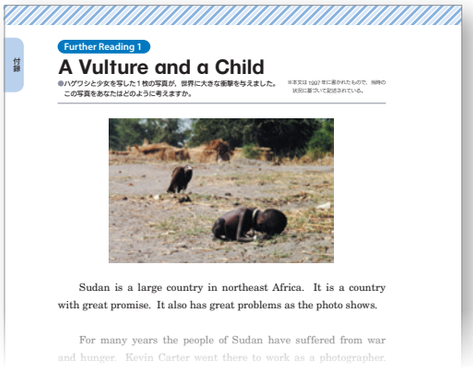
英米の生活文化を紹介する教科書が多い中にあって、日本の生活文化も積極的に紹介しています。そうした発信型の題材も初版当時としては、珍しかったと思います。



（平成28年度版 Book 1 前見返し『主な登場人物』）

多様な題材

アフリカや中国、韓国など英米だけではない生活や文化を話題としてとりあげています。多様なものの見方・考え方に触れ、他者の目線、立場を尊重する心を養うこともねらいました。人間の尊厳について考えさせる「キング牧師」や究極の選択を迫る「ハゲワシと少女」の話は、『ニュー・クラウン』で学んだ生徒の心に深く刻まれ、大人になってもなおよく覚えていただいている題材の双璧です。



Further Reading 1

A Vulture and a Child

※ハゲワシと少女を写した1枚の写真が、世界に大きな衝撃を与えました。この写真をあなたはどのように考えますか。

※本文は1997年に書かれたもので、当時の状況に基づいて記述されている。

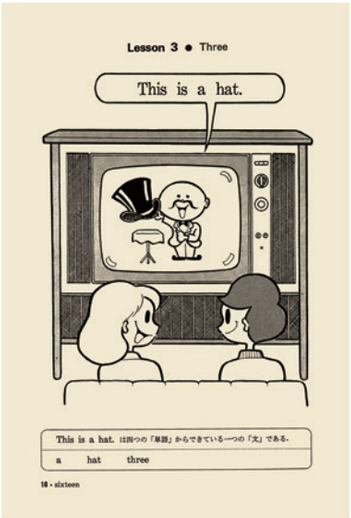
Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. It also has great problems as the photo shows.

For many years the people of Sudan have suffered from war and hunger. Kevin Carter went there to work as a photographer.

（平成28年度版 Book 3
Further Reading 1『A Vulture and a Child』）

生きた英語

This is a pen. ――1年生の初期で習うこの構文も、それ以前であれば、ペンの絵が描かれている挿絵とともに示されているだけで、場面や状況も不明な教科書がほとんどでした。『ニュー・クラウン』では、同じ構文の導入に手品師を登場させて場面と状況がわかるようにし、ことばはただことばとしてそこにあるのではなく、人間が使う血の通った「生きた英語」としています。



Lesson 3 ● Three

This is a hat.

This is a hat. は四つの「単語」からできている一つの「文」である。

a hat three

16 • sixteen

（昭和53年度版 Book 1 Lesson 3『This is a hat.』）

姓名の順序

英語では「Ken Kato」のように日本人の名前を姓名逆にすることが一般的でしたが、『ニュー・クラウン』は昭和六十二年度版から、「Kato Ken」と姓名の順序で表記しています。個人の名前はそのアイデンティティーを示すもので、英語表記の中でも本来の順序を尊重したいという考え方に基づくものです。二〇〇〇年の国語審議会答申でも、「姓名の順序が望ましい」とされています。

（昭和62年度版 Book 1）

SSD-EV002.indd 11 2018/08/21 12:08

教育最前線 Education Vanguard

第2号

二〇一八年九月二十七日発行

[編集・発行人] 北口克彦

[発行所] 株式会社 三省堂

[印刷所] 株式会社 谷口製作所

design : tsuyoshi＊graphics

SSD 三省堂

三省堂教科書・教材サイト　http://tb.sanseido.co.jp

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14　TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

●大阪支社　〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3　TEL (06) 6341-2177
●名古屋支社　〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31 協和丸の内ビル2F　TEL (052) 953-9211
●九州支社　〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1　TEL (092) 531-1531
●札幌営業所　〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15 ビル3F　TEL (011) 616-8722

SSD-EV002.indd 12　2018/08/21 12:08